

〈コラム〉

北京留学記——中国人民大学への留学——

辻原 明穂

はじめに

第一章 「中国政府奨学金留学生」への出願から合格通知まで

第二章 語学研修

第三章 研究生生活

第四章 北京の気候と交通事情

第五章 北京市内の散策

第一節 北京動物園

第二節 北京海洋館

第三節 故宫博物院

おわりに

はじめに

北京留学記

私は、二〇一二年三月に京都女子大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程を修了し、同年九月から中国に留学している。留学先は、北京市にある中国人民大学だ。当初は、二〇一四年七月で留学を終了する予定であったが、留学期間の延長を申請したため、現在も継続し

て留学中である。

私は中国の明代（一三六八年～一六四四年）史を専門に研究している。北京は現代中国の首都だが、明代の首都でもある。有名な故宫博物院をはじめ、明代の歴史遺産が多く残る北京、素晴らしい場所だ。大気汚染等、いろいろと問題もあるかもしれないが、日本で言われているほど大気の状態は悪くない。実際、私自身、毎日健康で快適な生

活を送っている。現地で風邪をひいて寝込んだことなどいまのところ一度もない。

そんな私が今回、編集部のために応じて「北京留学記」を執筆することになった。日本での留学準備にはじまり、人民大学での語学研修、人民大学の学部や大学院の授業、清史研究所の様子と、留学中の研究成果、授業の合間におこなった北京市内の散策などを、現地で撮影した写真をまじえながら述べていきたい。

第一章 「中国政府奨学金留学生」への出願から合格通知まで

留学を希望した理由は、まず自分の研究をすすめていくうえで、日本国内の図書館よりも史料の充実している北京で史料収集をし、同時にフィールドワークもおこなう必要があること。また、日本国内にとどまっているだけでは視野もせまくなる。中国に渡って長期間滞在し、その間に中国の研究者や大学院の若手研究者との交流を深め、知識の幅を広げ、中国語をマスターしたいと考えた。そして何より中国人民大学を選んだ理由は、自分の研究テーマに近い分野を専門とする教授陣が揃っていることだ。現在、こうした恵まれた環境で日々勉学に励んでいるわけであるが、ここに辿り着くまでの道のりは長かった。以下に順を追って、どのように留学したのか説明する。

まず私のこの北京留学は、平成二四年度中国政府奨学金によるものである。名前の通り、留学時の費用を中国政府が負担する。毎月奨学金が銀行口座（現地で口座を開設する必要がある）に振り込まれ、それで生活していくという留学方法だ。

私が出願した平成二四年度は、日本国内で一〇名の募集があった。留学時の身分、および奨学金支給額（当時は一元〓約一六円）は次のようになっている。各身分で何名ずつ募集されていたのか、また試験の合格倍率等も不明である。

本科 生（学部生）…月額一、四〇〇元支給（約二二、四〇〇円）。
普通進修生（学部の聴講生）…月額一、七〇〇元支給（約二七、二〇〇円）。

碩士研究生（大学院の博士前期課程）…月額一、七〇〇元支給。
博士研究生（大学院の博士後期課程）…月額二、〇〇〇元支給（約三二、〇〇〇円）。

高級進修生（大学院の聴講生）…月額二、〇〇〇元支給。

私は現在、高級進修生として留学している。上述の通り、「高級進修生は月額二、〇〇〇元」というのは一か月生活するのに十分な金額だ。この二、〇〇〇元の中に、学費、住居費、医療費、教材費、生活費等すべてが含まれている。

中国政府奨学金留学生の募集要項は、独立行政法人日本学生支援機構のホームページからダウンロードすることができる。募集要項を熟読し、留学の前年（二〇一一年）秋頃から準備をはじめた。出願の方法は、インターネットで出願した後、紙媒体の書類を郵送して出願するという二段階の形式をとる。

まず、中国国家留学基金管理委员会を通じておこなうインターネット上での出願がある。ここで提出するのは中国政府奨学金申請表だ。ネット上にある出願フォームに必要事項を中国語で入力し、データを送信して完了する。

次に、紙媒体の書類作成に入る。前述の中国政府奨学金申請表をPDF形式でダウンロードして印刷、最後に署名をして申請表を完成させる。大変なのは、申請表以外の書類を揃える作業だ。郵送する書類には、ほかに研究計画書（記入する内容は、留学を志望した理由、留学中の研究計画、帰国後の計画である）、大学と大学院すべての学業成績証明書、卒業証明書、在学証明書、卒業見込証明書、受入内諾書、推薦状、パスポートのコピーや戸籍抄本など、全部で十数種類の書類がある。

これらの書類は中国語（または英語）と日本語の両方で作成せねばならない。しかも日本語で作成した書類、中国語（または英語）で作成した書類を別々に準備し、原本とそのコピーを八部〜十部（書類の種類によっては一部でよいものもある）ずつ準備する必要があった。書類の大きさ、並べる順番、書類をホチキスでとめる位置も指定されており、少しでも不備があれば受理されない。誤字脱字の確認はもちろん、抜け落ちている書類はないか、並べる順番は間違っていないか、時間に余裕をもって慎重に作業を進め、何度も確認することが重要だ。私の場合、書類が大量になったため、封筒には入りきらず、段ボール箱を用いて宅急便で郵送したのを記憶している。

書類の出願締め切りは「二〇一二年三月一二日の一七時必着」であった。書類審査に合格すると、四月に「東京国際交流館プラザ平成」で実施される面接試験にのぞまねばならない。私は午前中に面接であったため、前日から東京へ出かけた。

面接は日本語と中国語の両方でおこなわれる。中国語での自己紹介にはじまり、提出した書類（おもに研究計画）に関して等、さまざま

な質問が面接官から飛んでくる。あの時の緊張と恐怖が入り混じった何ともいえない気持ちは、一生忘れることはないだろう。「どうか合格してほしい」、帰りの新幹線ではひたすらそう願っていた。

その後、何日か経って文部科学省から面接試験の合格通知があり、ひとまず日本国内の選考は通過した。しかしここで安心してはならない。まだこの段階では、国内選考に通ったにすぎず、どの大学へ留学できるのかはわからないのだ。願書には、入学したい大学を第三希望まで記入することができるが、第一希望の大学へ入学できるかどうかの決定は、七月頃に届く中国政府からの「録取通知書」を待たねばならない。録取通知書とは合格通知書のこと、それには以下のように記されていた。本稿では、はじめに原文、後に日本語訳を載せた。なお、実際の録取通知書には、簡体字の中国語のみが記されている。

〔原文〕録取通知書

辻原明穂同学

我們高興地通知您、經審查您的申請材料、我校已經決定錄取您作為高級進修生進入我校歷史學院學習中國近現代史專業、學習期限為二〇一三年九月至二〇一四年七月、授課語言為中文。

是否漢語補習是請于二〇一二年九月至二〇一三年七月、在中國人民大學文學院進行漢語補習。根據國家留學基金管理委員會的通知、您在中國學習期間的經費辦法為全額獎學金（含學費、住宿費、醫療費、教材費、生活費）。…（中略）…。

如果您自願遵守中國政府的法律・法規和學校的校紀・校規、請您持本「錄取通知書」、「外國留學人員來華簽證申請表」（JW二〇一表）和「外國人體格檢查記錄」及血液化驗報告（均為原件）、

前往中国大使館（領事館）辦理來華學習（F）或（X）簽證、并于二〇一二年九月三日、到中国人民大学留学生辦公室報到。如因故不能按時到校、必須事先徵得我校同意。否則、將作為自動放棄入學資格、本錄取通知書失效。

中国人民大学留学生辦公室

二〇一二年六月五日

…（中略）…。

注意事項

一、請您一定持來華學習（F）或（X）簽證入境。否則、一切後果由本人自負。

二、持X簽證者、需在入境三〇天內通過學校向公安局辦理居留許可手續、逾期所受處罰費用自理。

三、來華時、請準備八張照片（與護照照片尺寸相同）。

四、若您的獎學金包含每月生活費、請務必在來校報到前、持本人護照在北京任意一家中國銀行開設個人銀行卡、報到註冊時攜帶該銀行卡登記、以做獎學金發放、賬戶必須為中國銀行賬戶。

〔日本語訳〕合格通知書

辻原明穂殿

私たちはよろこんであなたに通知する。申請書類を審査した結果、我が校では、あなたが高級進修生として中国人民大学の歴史学院に入学し、そこで中国近現代史を学ぶことを決定した。学習の期間は二〇一三年九月から二〇一四年七月までとする。

中国語の語学研修については、二〇一二年九月から二〇一三年

七月までとし、これは中国人民大学の文学院でおこなわれる。国家留学基金管理委員会の通知に基づき、中国で学習する際の費用は、全額奨学金（学費、住居費、医療費、教材費、生活費を含む）とすることを通知する。…（中略）…。

もしあなたが中国政府の法律・法規と学校の校紀・校規を遵守するのであれば、「録取通知書」、「外国留学人員來華簽證申請表」（JW二〇一表）と「外国人体格検査記録」および血液検査の報告（すべて原本とする）を持って、事前に中国大使館（領事館）へ行き、学習ビザの「Fビザ」あるいは「Xビザ」の手続きをおこなうこと。そして二〇一二年九月三日までに中国人民大学の留学生事務室に来て、所定の手続きをおこなうこと。もし期日に間に合わない場合は、事前に連絡をして我が校の同意を得ること。連絡が無い場合は、入學資格を放棄したものとみなし、この合格通知書は失効する。

中国人民大学留学生事務室

二〇一二年六月五日

…（中略）…。

注意事項

一、必ず、学習ビザの「Fビザ」あるいは「Xビザ」を持って入国すること。そうしなかった場合に生じた後の結果については、すべて本人がその責任を負うこと。

二、「Xビザ」を持つ者は、入国後三〇日以内に、学校を通じて公安局で居留許可証の手続きをしてもらうこと。期日を過ぎた場合、それにかかる処罰の費用は自己負担とする。

三、中国に來た際、八枚の写真を準備しておくこと（パスポート写真と同サイズ）。

四、奨学金に毎月の生活費が含まれている場合、必ず大学で届出をする前に、本人がパスポートを持って北京の中国銀行へ行き、そこで口座を開設して銀行カードをつくること。届出時には、銀行カードを携帯して登録をすること。これによって奨学金が振り込まれるので、口座は必ず中国銀行の口座とすること。

ようやくここでのこの大学に配属されるのが確定する。北京市内の大学は人気が高く、希望通りの大学へ留学できない場合もある。そうした状況で、私は第一希望の中国人民大学に留学できることが決まり、非常に嬉しかった。

第二章 語学研修

知られるように、中国は九月に新年度が始まるサイクルで、日本とは異なる。まず九月から翌年一月頃までが前期。二月頃に春節（中国の正月）を迎え、二月下旬頃から後期が始まり、六月に年度末をむかえる。留学形態によっては冬二月から入学する場合もあるが、中国政府奨学金留学生は九月に入学するかたちとなっていたため、私は九月から留学を開始した。

北京へ渡航したのは二〇一二年九月一日。前述の録取通知書には「九月三日までに大学へ来るように」とあったため、数日の余裕をもって九月一日を渡航日に選んだ。九月といえば、日本ではまだ残暑が厳しい。しかし北京ではもう秋だ。二〇一二年九月一日も、さわや

かな秋晴れで、少し肌寒かったおぼえがある。

北京首都国際空港から北京市内まで、バスやタクシーで移動してもよいが、機場快線（エアポートエクスプレス）という電車もおすすめである。この電車は非常に便利で、空港から北京市内までを二〇分程度で結ぶ。北京市内を走る地下鉄が「どの駅においても二元（約三二円）」という安さに比べ、機場快線は二五元（約四〇〇円）とやや高めだが、「速さ」、「快適さ」はバスやタクシーとは比べものにならない。私は毎回、空港―北京市内間の移動は、かならず機場快線を利用している。

機場快線と地下鉄を乗り継ぎ、二時間ほどかけて中国人民大学へ向かう。大学のある場所は、北京市海淀区に位置し、この地区はほかに北京大学や清華大学など、多くの有名大学があることで有名だ。地下鉄四号線には「人民大学」という駅があり、そこで降りると徒歩数分で中国人民大学の東門に到着する〔写真①参照〕。

人民大学は、人文科学、社会科学の分野に力を入れている大学で、中国国内の重点大学の一つだ。学生数は二万人以上、また九十か国以上から多くの留学生を受け入れている。とくに経済学、国際関係学、商学、新聞学、法学、歴史学などは中華人民共和国教育部（日本の文部科学省に相当）によって重点科目として位置づけられ、中国の教育界においてリーダー的な役割を担っている大学だ。

学内にはいろいろな売店、カフェや食堂、郵便局や銀行などがあり、生活に不自由することはあまりない。大半の学生が学内の寮に住み、生活している。中国の大学は、日本の大学とは異なり、大学そのものが一つの町のようになっているのだ。ジョギングや散歩をする学生、



〔写真①〕 中国人民大学の東門。2014年夏、筆者撮影。

学内の広場で外国語の発声練習をする学生、運動場でバスケットボールやサッカーをする学生たちで常ににぎわっており、眠らない町といった雰囲気だ。こうした喧騒の世界もはじめは慣れなかったが、どこでも住めば都。私は今ではすっかり馴染んでいる。

ではここで、大学での授業はどんなものか少し紹介したい。

留学生活一年目は、中国語の語学研修に費やした。録取通知書に記載があったように、二〇一二年九月から二〇一三年六月まで語学研修を受けた。一時間目は八時から九時半、二時間目は一〇時から一時半。昼休みは二時間程度あり、午後の授業は一四時開始だ。しかし語学研修は、基本的に午前中のみおこなわれ、午後は自由時間となっている。遊びにでかける留学生もいたが、私はほぼ毎日、授業の予復習と宿題、そして自分の研究にこの時間を使っており、遊びに行く余裕など無かった。

授業科目は閲読（速読）、口語（会話）、写作（作文）、精読（読解）、聴力（聴解）の五種類。一週間の時間割の例を示すと以下のようになる。

月曜日…一時間目写作、二時間目聴力。

火曜日…一時間目精読、二時間目口語。

水曜日…一時間目精読、二時間目聴力。

木曜日…（二時間目は無し）二時間目口語。

金曜日…一時間目閲読、二時間目精読。

クラスは上級班、中級班、初級班に分かれており（年によって異なるが、上級班、中級班、初級班それぞれがさらに数クラスに分かれている。たとえば上級班四クラス、中級班三クラス、初級班二クラスと

いうように。私は二〇人程度の中級班に所属していた。

どんな国から留学生が来ているのか。留学生全体でみると、韓国からの学生が最も多く、学内にも韓国料理の食堂があるほどだ。私のクラスの場合、韓国人は少なく、アイルランド、アメリカ、イギリス、インドネシア、カザフスタン、韓国、ジンバブエ、スペイン、ドイツ、日本、フィンランド、フランス、ベトナム、ペルー、ベルギー、モンゴル、ロシアなど世界各国から留学生が集まっていた。とりわけ私のクラスには、ジンバブエの留学生が多く所属していたため、私の友人には今でもジンバブエ人が多い。

授業中は基本的に中国語のみで会話するが、休み時間になるとみな母国語で話をはじめめる。飛び交う言語は多数で、なかには数か国語に長けた留学生もあり、フランス語を話すモンゴル人、日本語を話すイギリス人など、非常に痛快的な世界が広がっていた。

また、授業を受けて感じたのは、やはり日本人・韓国人留学生は作文に優れ、欧米の留学生は「聴く」、「話す」ことに長けていたことだ。日本人である私は、閲読、写作、精読の授業に関しては問題なかったが、口語と聴力は毎時間苦勞が絶えず、「中国語を聴き取ること」に奮闘した。とくに口語の授業では、毎回宿題が出され、それを次の回の授業で報告するという形式がとられた。その宿題は、単に問題集を解くというような内容ではない。

例をあげるなら「自国で人気のある歌手とその歌を紹介する」、「北京市内で実際にタクシーに乗り、タクシーの運転手にインタビューをする」といったものだ。宿題は一見簡単に感じるが、中国語で説明するのは容易ではない。毎時間出題される難問を解決するため、私はイ

ンターネットを利用して調べたり、パワーポイントを駆使したり、あるいは他の留学生と協力して宿題をする等、いつも楽しく取り組んだ。前述のように、私が所属する中級班は二〇人前後のクラスであったが、時が経つにつれて次第に人数が減っていった。留学生の中には怠惰な学生もいるからだ。学期がはじまって最初の頃は、みな真面目に授業に出席し、講義室の座席もある程度は埋まっている。だが数週間経つと、次第に遅刻、欠席が増え、クリスマスシーズンには大多数が欠席という状態。始業ベルが鳴った際、講義室に教授と自分一人という日もあったほどだ。

一時間目が朝八時から開始ということもあり、「朝がはやすぎて起きることができない」という理由で遅刻。「授業はつまらないから旅行に行く」という理由で堂々と数日間欠席。またほかに「好きな科目のみ出席する」、「宿題は面倒だから毎回やらない」、「テキストは購入せず、友人から借りてコピーで済ませる」という学生も多かった。

なぜこれほどまで不真面目になるのか、私は不思議でならなかったが、考えても答えの出るものでもない。周囲が堕落していく中、決して遅刻、欠席はせず（これは当然のことだが、それさえできない留学生が多い）、ただひたすらマイペースで学び続ける姿勢を私は貫いた。

第三章 研究生活

二〇一二年九月から二〇一三年六月までで語学研修が終了し、二〇一三年九月からは留学二年目を迎えた。以降は、一般の中国人学生にまじって、学部や大学院など、自分の専門分野に関係する授業に出席している。授業のテーマは、たとえば学部では「中国古代史」、大学

院では「中国古代政治制度史」といったものがあり、どの授業においても中国人学生は非常に真面目だ。日本の大学でしばしば見られる遅刻や欠席、授業中に居眠りをする学生はほとんどいない。授業の休み時間においても、階段や廊下、空いている講義室を使って勉学に励む中国人学生の姿があちこちにある。

学部での授業はおもに講義形式だが、日本の大学のように、学生がただ黙って講義を聞いているだけではない。授業中に学生側から自由に質問が出され、教授がそれにこたえる。教授と学生が一体となって授業がすすめられていくのだ。中国語の聴き取りが困難な私は、最初は学部一年生の授業に参加した。学生は三〇人程度だが、男性も女性も自由に手をあげて質問や感想を述べ、始終活気のある空間がそこには広がっていた。

学部での授業では指定されたテキストがあったため、テキストを事前読んで授業にのぞんだが、必ずしもテキスト通りに授業が進むとは限らず、毎時間ノートをとるのは必死であった。教授の中国語を理解することが困難な場合は、テキストからヒントを得るか、あるいは黒板に書かれた文字で理解する。しかし板書された文字もきれいな楷書体ではなく、行書体（教授によつては、草書体よりも更に崩れた解説困難な状態）に近い文字の場合は大変だ。日本人が書く漢字と、中国人が書く漢字はまったく違う。同じ漢字を同じように行書体で書いても、異なる文字に見えるのだ。漢字だけの世界に生きる中国人の「非常に書き慣れた漢字」と、平仮名、カタカナ、漢字の三種を用いる日本人が書く漢字とは、これほど差があるのかと、板書された文字を見て実感した。

一方、大学院の授業は、講義のほかに、院生どうして討論するものがある。テキストは特になく、教授から毎回十数本の中国語論文が渡され、それを次回の授業までに読んでいく。これが宿題だ。論文を読んで、そこから疑問点や問題点、感想などを考え、次回の授業で一人ずつ発表し、参加者全員で討論する形式がとられた。

人前で発表することに対しては、私はさほど抵抗や緊張はない。むしろ、ずっと座って聞いている講義形式の授業より、自由に意見を述べ合う方が楽しい。問題は、「自分の意見を中国語でいかにわかりやすく伝えるか」という点だ。何を発表しようか考える楽しみと、それを中国語でどのように説明するかという苦悩、この二つが混在する複雑な心境が毎週私の心に満ちていた。難解な専門用語の聞き取りに加え、討論形式ともなれば困難を極めるが、私は黒板とパソコンを活用し、「話す」「書く」二つの手段で毎回の授業を乗り切った。

本稿の第一章でも触れたように、高級進修生には、中国政府奨学金留學生の出願時に日本語と中国語の両方で作成した研究計画書の提出が求められる。人民大学に留学が決定し、実際に入学すると、今度は自分の指導教授に研究計画書を提出せねばならない。内容は、現在までの研究状況、研究業績に加え、留学中の研究計画、帰国後の計画などを詳細に記載したものだ。留学中は基本的にこの計画書に沿って研究をすすめる、適宜、指導教授の指導を仰ぐというのが人民大学の高級進修生だ。

高級進修生は、大学院の授業に参加できるが、単位の認定はおこなわれない。日本風にいえば大学院の聴講生であるため、私の場合、所属は学部生と同じ歴史学院となっている。つまり、学部と大学院両方

の授業に参加することができる特殊な身分といえる（人民大学の留学生で、高級進修生の占める割合は非常に少なく、人数は数える程度だ）。ただ、日本の大学とは異なり、いわゆる「もぐり」で自由に聴講することはできない。自分が出席したい講義の担当教授に承認を得なければ参加できないのだ。

人民大学には清史研究所という研究機関があり、ここは私が所属している歴史学院とは別部署だ。歴史系の学部生が歴史学院で学ぶのに対し、清史研究所は大学院生が学ぶところである。

一九五〇年～六〇年代において、周恩来主導のもとで『清史』の編纂事業がなされた際、清史編纂委員会の成立と同時に、人民大学に清史研究所をつくることが決定された。一九七八年には、中華人民共和国教育部の批准を経て、正式に清史研究所が成立する。以後、清史の研究、清史専門家の育成、『清史』の編纂を主な任務とし、中国歴史学の発展に貢献している。

ここでおこなわれている研究は、もちろん清代の歴史に関してだけではない。清史研究所は、古代史から現代史まで幅広い研究と専門家の育成をしている研究機関であり、中国国内で「教育部人文社会科学百所重点研究基地」と格付けされている。研究所の内部は「中国古代史教研室（教研室とは、教育研究室のことである）」、「中国近現代史教研室」、「専門史教研室」、「中外関係史教研室」、「歴史地理教研室」、「歴史文献教研室」、「滿文文献研究中心」、「生態史研究中心」、「清代皇家園林研究中心」に分かれ、各研究室に数名の教授が所属している。大学院生は博士後期課程、博士前期課程ともに、「中国古代史」、「中国近現代史」、「専門史」、「歴史文献学」、「歴史地理学」、「史学理論与

史学史」という専攻に分かれ、前述の研究室のどこかに所属し、指導教授のもとで研究に励む。私は、おもに中国明代の地方行政について研究しているため、これと近い分野を専門とする中国古代史教研室の劉鳳雲教授に師事し、学んでいる。

私は研究計画書に記した通り、順調に研究をすすめ、留学一年目には、明代の地方行政に関する論文「明代巡撫の地方常駐化とその意味——南贛巡撫を手掛かりに——」（『アジア史学論集』第六号、二〇一三年四月）をまとめ、二年目には研究の幅を清代まで広げて Robert Kent Guy 著 *Qing Governors and Their Provinces: The Evolution of Territorial Administration in China, 1644-1796*（『洛北史学』第一六号、二〇一四年六月）の書評を発表した。

第四章 北京の気候と交通事情

次は、大学の外に目を向けてみよう。

北京といえはPM二・五で有名な大気汚染だが、現在はそれほどひどくはない。確かに冬の一時期、とくに二月頃は、一日中灰色の空気がどんよりとたちこめ、朝起きて寮の窓を開けると外は一面灰色、そんな景色が広がっている日もあった。しかし春、夏、秋は青空が広がり、比較的快適な気候だ（写真②参照）。

日本と同じように北京にも四季があり、春と秋は穏やかで、夏は酷暑、冬は極寒。ただ一年を通じて乾燥しているため、夏はたとえ四〇度を越しても、数字からイメージするほど暑くはない。湿気が少ないからだ。たとえば日本の京都は、三〇度でも湿度が高いため非常に蒸し暑く感じ、体力の消耗も激しい。その点、北京はカラッと乾燥して



〔写真②〕 雲一つない青空が広がる北京市内の様子。北京市海淀区の中関村大街にかかる歩道橋から撮影したもの。写真には写っていないが、左側に中国人民大学の東門がある。2014年夏、筆者撮影。

いるため、京都の夏よりもずっと過ごしやすい。

一方、冬は零度以下になることが多い。これも気温の上では極寒に感じるが、実際はただ空気が冷たいというだけで、深々と冷え込む日本の冬とは少し異なる。確かに一二月頃には、食堂の排水管から流れ出た水が、「流れ出ている状態のまま」凍結している場合もある。だがここまで気温が低下すると、感覚が麻痺し、逆に寒さを感じない。その意味で、深々と冷え込む真冬の京都より過ごしやすいと私は思った。

北京で暮らして意外に快適と感じたことは気候だけではない。交通事情も快適なのである。北京の交通機関には、地下鉄、バス、タクシーがあるが、私がよく利用するのは、地下鉄とバスだ。

まず地下鉄は中国語で「地鉄」と書く。地下鉄の中国語表記に示されているように、地下鉄の外見も、駅のホームも日本とそれほど変わらない。東京ほどではないが、北京にも網の目のように地下鉄の路線がはりめぐらされている。天安門を通る一号線、環状線となっている二号線、人民大学や北京大学を通る四号線のほか、五号線、六号線、八号線、九号線、十号線、一三号線、一四号線、一五号線などがある。現在も工事中の駅は多く、今後も新路線が次々と開通する見通しだ。

数分間隔で次の列車が到着する。始発は五時台からあるが、終電は早く、二三時前後になくなるため、遠出をした場合は終電を逃さないよう注意せねばならない。私がいつも利用する人民大学駅は地下鉄四号線にある。この路線は比較的新しい線で、外国人の乗客が多く見られる。大学が林立する海淀区を通る路線のためか、外国人や裕福そうな乗客を狙う物乞いも多く乗車している。音楽を録音したテープを身

につけ、大音量で音楽を流しながら、あるいは楽器を持って自ら歌いながら乗客の注意を引きつけ、車内を歩き回り、金銭を集めるのだ。私も今まで何度これらの物乞いに遭遇したかわからない。金銭を求められても、無視をすればだいたいは回避できる。しかし中には非常にしつこい物乞いもあり、財布を出すまでずっと隣にびたりとくっついて立っている場合もある。そうした物乞いに遭遇した際は、さっさと降車するのがよい。降りてしまえば追ってこないからだ。

また、車内では急ブレーキにも要注意だ。吊革などにつかまらず、ボーっと乗っていると、急ブレーキで転倒する恐れがある。荷物の多少にかかわらず、私は常に、しつこい物乞いから逃げられるよう、そして急ブレーキで怪我をしないよう、ドア付近でどこかに捕まって乗ることを心がけている。

もう一つ、急ブレーキや物乞い以上に中国らしさを感じたことがある。オーバーランをしても、無言でバックしていたことだ。停車位置を普通に通り返し、一旦停車、そして何事もなかったかのようにバック。わずか数十秒の出来事だが、貴重な経験をしたと思う。今まで日本では数えきれないほど地下鉄を利用してきたが、バックする地下鉄にお目にかかったことはない。また日本であれば、急ブレーキやオーバーラン等の場合、何かしら謝罪のアナウンスがあるだろう。しかし北京の地下鉄にそれはなかった。

次にバス。中国語では「公共汽車」と書く。先ほどの地下鉄と違い、漢字だけ見るとバスというイメージからは程遠い。日本のバスと程遠いのは名前だけではなく、その乗り心地にも大きな違いがある。

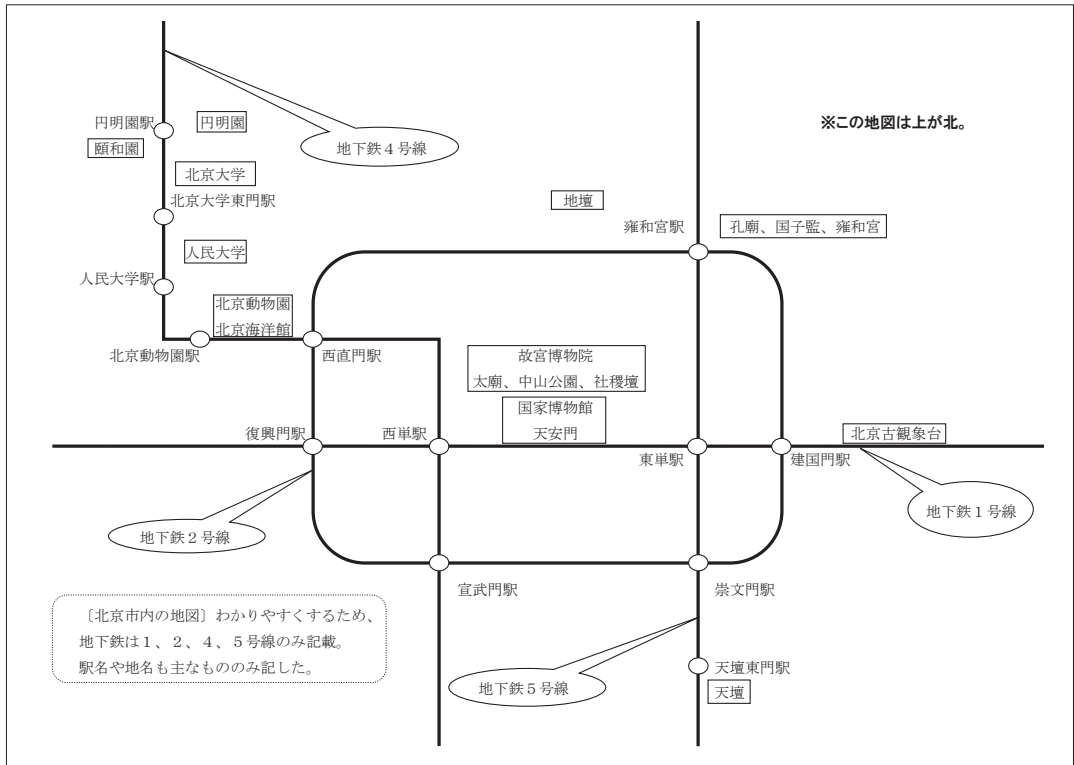
北京のバスは運転が豪快だ。周囲にどれだけ多くの自動車がとまっ

ていようと、バスの運転手は自分の行きたい方向へ行く。何車線もある道路を一気に端から端へ車線変更する様は見えて清々しかった。豪快な運転だけでなく、乗客にも驚愕したことがある。バスをタクシーのようにとめる乗客だ。バスに乗って窓の外を眺めていると、向こうの方から小走りにやってくるひとりの老人がいた。何をするのかと見ていたら、その老人はバスの近くまで来ると、突然手をあげ、バスをとめて乗車してきた。バス停でもない場所、である。とまる運転手も運転手だが、「必ずとまる」と信じて乗りにくる老人も老人だと、私は非常に驚いた。

交通機関ひとつをみても、中国らしさが溢れている。細かいことはあまり気にしない中国人、こうした気風に対する感じ方は人それぞれであるが、私には快適に感じられた。現在も私が地下鉄とバスを愛用する所以である。

第五章 北京市内の散策

周知のとおり、北京市内には数多くの名所旧跡がある。故宫博物院をはじめ、頤和園、円明園、孔子廟、国子監、国家博物館、社稷壇、北京海洋館、北京古観象台、北京動物園、太廟、地壇、中山公園、天壇、雍和宮など、私は授業の合間を利用してこれらの場所をめぐった（各々の場所については、北京市内の地図を参照）。出かけた時期はおもに秋。とくに一〇月から十一月の北京は気候も穏やかで、澄み渡る空や紅葉した木々が非常に美しい。また頤和園、円明園、故宮博物院、北京動物園のように、あまりにも広大な場所に関しては、一度ではまわりきれずに何度も足を運んだ。行きたい場所へ何度でも訪れること



ができる、これこそ留学の醍醐味だ。北京市内の散策において、私が「中国らしさ」を感じた印象的なエピソードを以下に述べたい。

第一節 北京動物園

人民大学からほど近い場所に位置する動物園。地下鉄四号線の北京動物園駅で降りて徒歩数分で到着する。北京動物園といえばパンダが有名で、動物園に入るとまずパンダ館がある。中国人にも外国人にもパンダは大人気で、土日も平日も朝から夕方までパンダ館内は観光客があふれている。

広大な園内には、パンダ館以外にもいくつかの館が建てられている。大きな館ではカバ館、象館、ペンギン館、両生爬虫類館などがあげられるが、館のほかに鹿園や鷹山といったブースも存在し、本稿には載せきれない程の種類がある。当然一日では見終わらず、すべてをまわるまで何度出向いたかわからない。

印象に残ったのはペンギン館だ。日本の動物園であれば、ペンギン館はペンギンのみ展示されているのが普通であろう。しかし北京では、なぜか金魚（スイホウガン、チョウテンガン、デメキン、ランチュウなど）日本でもよく見かける種類が大半）が同じ館内に展示されていた。館内は縦に細長い形をしており、入って右側にペンギン、左側に金魚という展示形式をとる。ペンギン館と称しておきながら、金魚の方が圧倒的に目立っているなんとも不思議な館だった。金魚の数が大量であるため、水槽内で病気が流行しているのか、なかには力尽きて水槽の底に沈んでいるような金魚も何匹も見られ、残念な気持ちになった。この二種類の動物を同じブースで展示する意図はいったい何なの



〔写真③〕 故宮博物院の入口。2013年秋、筆者撮影。

か、いまだに謎である。

第二節 北京海洋館

北京海洋館は、実は北京動物園内に存在する。入館料は非常に高く、日本の水族館と大差ない料金で、私が行ったときは大人一名一二〇円（約一、九二〇円）であった。高額ゆえに、めったに行ける場所ではないと知り、海洋館は一日ですべてまわり終えた。

海洋館を見て感じたことは、まずどの水槽にも魚を入れすぎだということだ。小さな水槽でひしめく魚たちに息苦しさをおぼえた。さらに、サンゴに挟まれて身動きがとれなくなっているウミガメ、足がちぎれたまま浮遊するクラゲ、人工的におこした水流が速すぎるため、うまく泳げずに半分流されている状態のカメ……。こうした光景を何度か目にした。

とりわけ不可解なのは、サンゴ礁で生きる魚（私が見た水槽ではチョウチョウオが飼育されていた）に、白菜を餌として与えていたことだ。水槽の天井から底にかけて張ったワイヤーに、小さくちぎった白菜が輪ゴムで括り付けられ、魚たちはそれを懸命に食べていた。ちなみに白菜を吊るした水槽の一つではなく、何個が存在する。

大海原に白菜はないと思うが、なぜ飼育員は白菜を餌に選択したのか。そして白菜を食す魚たちは、いったいどんな気持ちで白菜を味わっていたのか。もし聞けるものならば、聞いてみたい。

第三節 故宮博物院

三つ目は、故宮博物院をとりあげる（写真③参照）。知られるよう

に、明代（一三六八年～一六四四年）と清代（一六四四年～一九一一年）に皇宮として使われた紫禁城に工芸品や考古出土品などを収蔵している博物館だ。通称では故宮という。最寄り駅は地下鉄一号线の天安門東駅。ここから徒歩数分で故宮に着く。時期によって若干の変動はあるが、私が訪れた時は入館料四〇元（約六四〇円）、学生証を提示すれば二〇元（約三二〇円）で入館できた。

故宮の中央を突き抜ける一般的なルートは、「午門→太和門→太和殿→中和殿→保和殿→乾清門→乾清宮→坤寧宮→神武門」だ。さすがにこのルートは平日、土日問わず観光客で賑わっている。外国人観光客だけでなく、中国人の団体旅行も至る所で見かけた。

故宮には売店、カフェ、書店、レストランが点在するほか、故宮の東側半分には、現在開放されている鐘表館（時計館）、青銅器館、珍宝館、陶器館などの展示室が多く存在する。私も初回は前述の王道ルートでまわったが、二回目以降は東側に位置するさまざまな館をじっくりと見物した。そしてここでも不思議な光景に出くわす。展示室の監視員が居眠りをしていたり、雑談に耽っていたり、ミカンを食べていたり（ごみ箱が近くに無かったのか、皮は窓のサッシ部分に積んでいた）と、日本の博物館にはない開放的な空気が漂っていた。

故宮見物で度肝を抜いたのは、観光客があふれる故宮入口の広場で用を足す幼児の姿だ。近くにいた幼児の親も、また故宮の警備員も特に注意する気配はなく、何も気にしていないようであった。故宮内には何箇所かにトイレが設置されており、個室の数も多い。にもかかわらず、トイレ以外の場所で、それも世界遺産で、こうした行為が見られるのは問題ではなからうか。疑問に感じずにはいられない。

さらに入口の広場には、世界遺産の景観にそぐわない不思議な物も置かれていた。バスケットゴールである。いつ誰が何のために使用するのかは不明だが、もう少し設置場所を考慮してもよかったのではと、私は感じた（写真④参照）。

歴史遺産を心ゆくまで堪能するのもよいが、それ以外の部分にも目を向けてみるのも面白い。現地で生活する人々の姿が生ききと視界に飛び込んでくるとともに、そこには本稿で述べたような新しい発見がたくさんあるからだ。

おわりに

以上、留学準備、語学研修、研究生活、北京市内の様子を簡単に述べてきた。最後は現在の状況を書いて締め括りたい。

人民大学で恵まれた学園生活を送る傍ら、以前から少し興味のあった「外国で母国語を教える」ことに二〇一四年からチャレンジしている。日本語教師の仕事だ。中国人の学生や社会人を対象に、初級・中級クラスの生活会話と、上級クラスのビジネス会話を教えているほか、日本への留学を希望する中国人の大学院生に対して、研究計画書の書き方を指導している。

授業のノウハウに関しては、以前自分が人民大学の語学研修で受けた授業が非常に参考になった。日本語と中国語は異なるが、自国の言語を外国人に教授するという点自体は同じだと私は考える。かつての語学研修を思い起こしながら、今度は自分が教える側として、日本の文化や伝統を中国人に伝えているのだ。

日中関係が緊迫している昨今、日本人の中国嫌いという現象がしば



【写真④】 故宮博物院の入口付近にあるバスケットゴール。2013年秋、筆者撮影。

しば見られるが、まず「嫌う」感情を持つ前に、その国のことをよく知るべきだ。現地の人々とともに生活をし、文化に触れることで、それまでのイメージとはまた違ったものが見えてくる。私が留学して感じたように、現地に長期間滞在し、そこで実際に見た中国と、日本で新聞やテレビを通じて見た中国とではいささか違いがある。大気汚染の問題がその一例だ。PM二・五はメディアで報道されているように、健康を害する。しかし年中灰色の空気がたちこめ、前方の景色が見えないという状況かといえれば決してそうではない。雲一つない青空、澄んだ空気の日もたくさんあるのだ。

本稿で述べた中国の姿は、ほんの一部に過ぎず、まだまだ書き尽くせない事柄が多く残った。二〇一四年九月からは留学三年目に入る。留学を通じた私の一連の取り組みが日中友好の懸け橋になることを願いながら、今後も引き続き充実した北京生活を送っていきたい。